

光輔

地面が固いせいか甲高いスコップの金属音が大きく響く。

「※○△×÷☆□◎！？」

「ええ？なんて？」

心菜の口だけがパクパク動いている。が、何も聞こえない。

俺は手を止める。

「そんなに！掘る必要あんの！」

「あるよ！十年の間に誰かに見つかって掘り返されたらどうすんの？」

「見つかるわけないじゃん」

景子が冷たく言い返す。目が「馬鹿なの？」と言っている。

「あんな？俺たちとおんなじこと考えたやつがおんなじところ掘る可能性もあるかもしれないだろ？」

「ないわ。キンキンキンキンうるさいし、もうやめなよ」

景子は「うう～寒い」とわざとらしく聞こえるように言うてくる。

「だいたいさ、タイムカプセル埋めようって思ったのは、景子の発言がきっかけなんだからな」

「もうそれも何回も聞いたってば」

心菜が俺たちの会話に割って入る。

「もう！なんでそうやってすぐけんかするの！」

俺と景子は瞬時に返す。

「けんかじゃねえよ」

「けんかじゃないってば」

二人の言葉は綺麗にハマる。あまりに綺麗だったので、心菜が笑う。つられて俺と景子も笑う。

「明日で中学生活が終わるんだよ？景子もそんな冷たく言わないでいいし、光輔はそんなに掘らなくても大丈夫だよ」

いつもの会話。いつものやり取り。俺と景子が言い合いをして、心菜が止める。そんな日常も明日で終わりだった。

俺たちがタイムカプセルを埋めようと計画し始めたのはちょうど今年が始まった日、二〇一〇年の元日だった。

毎年必ず三人で初詣に行くのがお決まりだった。三人で元日の朝に集まって、近所の神社にお参りする。それだけ。

「今年で最後かもね……」

お参りを終えて神社のベンチに腰掛けたあと、景子がボソっと言った。

俺たち三人はいつも一緒だった。

大阪にある小さな市にある小さな村、百白（ひやくしろ）村で俺たちは育った。

百白村の人口は数百人ほど。ほとんどが老人。ほぼ全員顔と名前が分かるくらいだ。コンビニにも車で行かないといけない。道路にはしょっちゅう動物が出てくる。田舎も田舎な村だ。

村唯一の百白中学校は全校生徒十二人。俺たちの学年はたった三人しかいなかった。

俺と景子と心菜。

小学校からずっと一緒。クラスも一つで、もちろんクラス替えなんてものもない。イヤでも三人はずっと一緒だった。

たとえけんかしてもクラスには三人しかいない。楽しかった思い出も、イヤな思い出も全部この三人と一緒にあった。

しかも俺以外の二人は女子。俺は同い年の男子の友達はいない。

それがイヤでイヤでたまらないときもあった。思春期のピークみたいな時期は顔を見るのもイヤなときもあった。でも、結局この三人しか気を許せる友達はおらず、ため息をつきながら二人と接した。

心菜。腐れ縁三人のうちの一人。ボケーっとしていて、どんくさい。顔を見ればすぐに機嫌がいいか悪いか分かる。

黄色いリュックサックがトレードマーク。こんなに目立つリュックを持っているのは心菜くらいなので、遠くから見てもすぐに心菜と分かった。

ことあるごとに俺たちにちょっかいをかけてくる。他の学年のやつには可愛って評判だが、それは一緒にいた時間が少ないから。一緒にいればいるほど、ウザい馬鹿な女度が増してくる。

景子。腐れ縁三人のもう一人。こいつもこれまた可愛くない。サバサバして「はいはい」が口癖。いつも言い合ってきたし、ときには本気でロゲンカもした。まあ結局、お互い謝り合って終わるんだけど。

そんなトゲトゲした奴なのに、たまにしんみりすることを言うこともある。それが他の学年のやつはツンデレなんて言いやがるが、そんなにいいものじゃない。ただの気まぐれなわがままだ。

その「しんみり」が初詣の終わりに出た。

「今年で最後」

俺は徳島の高校へ進学することが決まった。陸上の大会でそれなりにいい成績を収めてきたおかげでスポーツ推薦が取れた。俺は勉強が出来ない。高校生活が陸上漬けになるのは少

しイヤだが、受験勉強はもっとイヤだった。

俺はこの村を出る。四月からは寮生活だ。

田舎の村とはいえ、名残はある。でも、いつまでもこの村にいるわけにもいかない。俺の出した結論は中学卒業とともにこの村を離れることだった。

景子は東京の高校へ進学する。景子の家庭は厳しい。親のスパルタ教育で勉強三昧。景子はバスを乗り継いで塾に通っていた。もちろん成績も優秀。そして、東京の名門私立高校合格を勝ち取ったのだった。

合格の報告を聞いたときは自分のことのように嬉しかった。景子がいつも地道に勉強しているのはずっと見ていた。心菜も目をうるうるさせながら「おめでとう」と言っていた。

東京の高校へ進学。東京の親戚の家で生活をするらしい。つまり、景子も春からこの村を離れるということだ。

心菜はこの村に残る。公立高校の入試がつい先日終わった。おそらく合格するであろうその高校はこの村からでもギリギリ通える。心菜は村に残り高校へ毎朝通学することを選択した。まあそれが普通の実験なんだけど。

三人は離れ離れになる。景子の言う通り、こうして三人で初詣に行くのは今年で最後だろう。

景子の呟いた言葉に心菜は反応しなかった。

神社に静寂が流れる。気まずい。

「……じゃあ、最後になんかするか？」

「なんかって何よ。」

それは俺も知らない。お前が「今年で最後」なんて寂しいこと言うから俺が無理矢理言ったんだろが、と言いたくなる。

いつもなら言ったけど、言えなかった。たしかにここ最近三人でいてもみんなどこか寂しそうだ。心菜は特にそうだった。

俺はまたテキトーに言う。

「……じゃあ、タイムカプセルでも埋めるか！」

あれから二ヶ月。俺はスコップを手にしていた。

景子

こいつは馬鹿だ。顔に泥をつけて、めちゃくちゃ深い穴を掘っている。もう光輔の下半身は穴の下で見えない。

タイムカプセルを掘ろうと言い出したのは光輔だった。光輔にしては珍しく可愛い提案だった。

断る理由もない。私と心菜は快諾した。

あとのことは光輔が勝手に決めた。十年後、二十五歳になったときに掘り起こすこと。学校の裏にある空き地、そこに生えているくすの木の下に埋めること。私たちは「はいはい」と従った。

しばらくすると光輔から便箋と封筒を渡された。

「これ何？」

「未来の自分へ手紙を書こう」

すると心菜は速攻で嫌がる。

「無理！私、手紙なんて書けないもん」

馬鹿な答えに光輔は戸惑う。そこからしばらく手紙を書きたい光輔と手紙を書きたくない心菜の口論が続いた。

「景子はどう思う？」

「どっちでもいいよ」

タイムカプセルって思い出のものとかを埋めるものだと思っていた。手紙も悪くないけど、そんなの十年後読むときめちゃくちゃ恥ずかしいんだろうなって思う。

「光輔だけ書けばいいじゃん、手紙」

「みんなで書くからいいんじゃないか。十年後、三人で掘り返して手紙が二通だったらイヤだろ？」

「別にいいもん」

見てられない。光輔はすぐに言い争いたがる。

「じゃあさ、質問にしたら？」

ここは私が折衷案を出して、醜い争いを止めなければいけない。

「質問？」

「うん。十年後の自分たちへの質問を書いたらいいんじゃない？それなら心菜も出来るでしょ？」

「さすが景子。頭いい」

心菜が雑に褒める。これもいつもこう。光輔は少し腑に落ち無さそうだったが、結局、十年後の自分への質問を書くことで収まった。

「これってさ、もちろんお互いの質問は見せないよね？」

「当たり前だろ」

心菜の質問にまだ腑に落ちてない光輔が冷たく返す。

誰もいない教室で私たちは手紙（質問）を書いた。

ポケットにその手紙が入っている。寒いからポケットに手を突っ込んで、穴を掘る馬鹿に言う。

「そんなに掘ったらさ、掘り返すとき見つからないよ？」

すると、光輔は私のこの質問を待っていたかのようにニヤリと笑う。

地面に手を置き「よっ」と声をあげ、光輔が穴から出る。リュックを開けると、大きな段ボール箱を取り出した。

「何よ、それ」

私の質問を無視して、光輔は段ボール箱を開ける。見慣れない機械が入っていた。それを取り出し黙々と組み立て始める。

出来上がったのは草刈り機のようなものだった。長い棒の先に丸い円がくっついている。手元には小さなモニターもついている。

「ねえ、それ何」

すると、光輔はリュックから今度はアルミの缶を取り出した。それを地面に置くと、その上に機械の丸い部分をかざす。

ピ—————

高い機械音が鳴り響いた。

「金属探知機」

光輔がドヤ顔で言う。

私のため息は機械音に消される。

「これさえあれば、どこに埋めても、どんなに深く埋めても大丈夫！」

「そんなのなんで持ってんの」

「お父さんの趣味」

どんな趣味よ、って言うのも面倒くさかった。

光輔は缶を穴の底に放りなげる。地表からでも金属探知機をかざすと、しっかりと反応するのを確認している。

「よし、埋めよう」

光輔は穴の底に目一杯手を伸ばして缶を取り出す。たぶんクッキーかなんかが入っていた缶だ。缶はかなりかっちり閉まるようで、光輔は力を入れて蓋を開けた。

「手紙出して」

三人は手紙を取り出す。全員同じ封筒。裏に名前が書いてある。それぞれの文字で『十年後の自分へ』と書いてある。何を書いたのかはお互い知らない。

それぞれが手紙を缶の中に入れる。あと、それぞれ自分がいれたい思い出のものも入れる。

「やっぱりなんかものとかもいれたらいいんじゃない？」

そう私が聞くと、光輔は驚きながら答える。

「なるほど、その発想はなかった」

こいつはタイムカプセルをなんだと思っているんだ。

持ち寄った「思い出のもの」を見せ合う。

私はレミオロメンのアルバムだった。

「なんで？」



心菜が聞く。

「好きだから」

「じゃあいれたらダメじゃない？」

「もう一枚持ってる」

私はCDは聞く用と保存用の二枚持っている。今回は保存用を一枚、タイムカプセルに捧げることにした。

「掘り返すのは卒業式の十年後なんでしょ？明日は何月何日？」

「三月九日か」

「だから面白いかな～って思ってた」

ふ～ん、と心菜は納得した様子。あと、十年経ったときCDというものがまだ使われているのかも気になる。

光輔はフィギュア。たぶんなんかレンジャーのやつ。小学校のとき、光輔はいつもこれで遊んでいた。そのせいでフィギュアの塗装ははげていてボロボロだ。

心菜はたまごっち。これも心菜は四六時中やっていた。「景子もやろうよ」と何度も誘われたが何が面白いのか全く分からなかったので断った。

「二人とも子供すぎない？」

「十年後見たら懐かしくなるんだよ」

うんうんと大きくうなづく心菜。この二人はたぶんIQが一緒だ。

手紙三通、CD、フィギュア、ゲーム。それらが入った缶を光輔が閉める。蓋を閉めたあと、ビニールテープでぐるぐるに巻く。

「これでよし」

光輔は缶を穴の底にそっと置く。

「埋めるよ？いい？」

私は無言でうなずく。心菜もうなずく。

光輔は山盛りの土を穴に戻し始めた。

「十年後か……」

心菜が聞こえるか聞こえないかの声で呟く。

私は何か返してあげたかったけど、何も返すことが出来なかった。

心菜

光輔は手を真っ黒にしながら土を穴に戻している。

こうして光輔と景子の横顔を近くで見られるのも、もう明日だけ。

なんとなく、この三人はずっと一緒にいると思っていた。でも、この町に残るのは私だけ。四月からどうすればいいんだろって悩むくらい、私は寂しかった。

でも、二人はそうでもなさそう。寂しくないのかな？あんまりそういう雰囲気は感じさせない。強がっているようにも見えない。

「で、どうすんの」

景子が唐突に聞く。私にだけに聞こえるような小声で。

「どうすんのって？」

「とぼけんじゃないよ。告白しないの？」

「えっ？」

「えっ？」とは言ったものの、その質問はいつかされるだろうなと思っていた。今されるとは思わなかったけど。

私は無言で誤魔化す。

「誤魔化しても無駄。顔真っ赤だよ。」

景子には私の誤魔化しは通用しなかった。

「光輔は明後日この村を出るの。明日は卒業式。告るんなら、今日か明日。はい、どうする？」

「どうするって……」

どうしよう。

小さな頃から私の周りに男の子は光輔しかいなかった。景子と光輔と遊ぶのが当たり前。私はずっとこの二人は幼馴染だと思っていた。

「あんた、光輔のこと好きでしょ？」

いつかは忘れた。暑い日だったか寒い日だったかも覚えてない。唐突に景子に言われた。

そんなこと考えたことなかった。好きな人が出来た、とかそんなこと。

「なんでそう思うの？」

「だって、放課後ずっと窓から光輔のこと見てんだもん」

そう言われた瞬間は確かに私の体は窓を向いていた。校庭では今日も光輔が陸上部の練習をしている。

「それは……、暇だから見てるだけ。暇つぶし」

拙い言い訳を無理矢理呟く。

「あっそう」

景子の返事はそっけなかった。

そのときはそれで終わったけど、それからも景子はたびたび私に聞いてきた。

「ほら、また光輔見てる」

それを言われるとき、私は必ず校庭向きの窓の方を向いていた。

よく分かんなかった。漫画とかアニメの恋愛ものは好きだけど、自分が恋愛しているかどうかは分かんなかった。

これもいつだったか忘れたけど、そのことを景子に言った。

すると景子は珍しく声を出して笑った。

「まあ私は心菜が光輔のこと好きなら応援するよ」

景子は時々その話を私にしてきた。冷やかしているつもりなんだろうか？いじっているつもりなんだろうか？でも私は「やめて」とも言えず、いつも誤魔化していた。

たまに夜眠れなくなる。

「私は光輔のことが好きなのかな？」

その答えは出なかったし、そんなこと考えている自分が急に恥ずかしくなったりもした。

でも最後は決まって、こう自分に言い聞かせていた。

「どうせずっと一緒にいるだろうし、今は今のままでいいや」

「俺、高校決まったかもしれん」

光輔が教えてくれたのは二学期だった。陸上の推薦をもらったって報告だった。

嬉しかった。光輔がいつも真剣に陸上に取り組んでいるのは知っていたし、なにより友達の進路が決まったことが嬉しかった。

でも、その日からまた新しい悩みが増えてしまった。

「今は今のままでいいや」

その「今」が終わる。明日で終わる。

「どうするのって」

景子は光輔に聞こえないギリギリ大きい声で私にもう一度聞く。

光輔は相変わらず穴を埋めている。

「……わかんない」

景子はため息をつく。

「私もこんな早く離れ離れになるとは思ってなかったよ。でも、いつかはそういう日が来るってのは分かってたでしょ？こんな村にいつまでも残る人なんていないだろうし」

「……………」

「明日、卒業式終わったら告白しよう。決まりね？」

「えええ！？」

私の声に光輔が気付く。

「どうした？」

「いや、なんでもない」

光輔は気に留めることもなく、穴を埋める作業に戻った。

「なんで景子が決めるの？」

「だってそうしないと告げないでしょ？」

全く持ってその通りだった。

「でも……」

「心菜は言うことだけ考えとけばいいよ。あとは私がなんとかするから」

「えっ？」

「もちろん二人きりにするから。ね？」

景子はにっこり微笑む。

私はうなずいた。うなずくことしか出来なかった。

「よし。終わった」

地面に人の肩幅くらいの直径の円が出来ていた。そこだけ他の地面と色が違う。

「次、ここを掘るのは十年後」

「楽しみだね」

景子は楽しそうに言った。

光輔は学校の時計を見る。

「やべっ。もうこんな時間じゃん。早く山登ないと日が暮れちゃう」

光輔は急いで金属探知機を箱になおしていた。

山に登る、と言っても大したことはない。学校の裏にある小さな山の途中まで登って夕日が沈むのを見ること。

私たちはよく夕方になると山に登っていた。そこで何もしゃべらず夕日が沈むのを見る。

沈んだら帰る。それだけ。

中学生になってから光輔が部活で来られなかったり、景子が塾で来られなかったりしたけど、私たちは時々山に登っていた。

それが出来るのも今日が最後。明日の夕方、光輔は忙しいらしい。

……………でも。

「心菜はやっぱり行けないのか？」

「うん」

私は今日は山に登らない。登れない。

絶対に外せない用事があった。

光輔

こうして同級生と山に登れるのも今日が最後かもしれない。

というのに、心菜は来なかった。

何度も「行かないのか？」と聞いたが、心菜は首を縦に振らなかった。

結局、俺と景子は心菜と別れた。心菜の黄色いリュックサックが離れていくのを二人で見送

った。

「なんで？なんで来れないわけ？」

俺は正直不満だった。

「たぶんなんか家の用事だよ」

そう答えるが、景子も腑に落ちてない様子だった。

心菜が来ないのは珍しい。よっぽどの事情があるんだろう。だから問いただしたりはしなかった。

でも、不満は不満だ。

「そんな不機嫌にならなくてもいいじゃん」

景子が俺の心を察して声をかけてくれる。

「うん」

小さく返した。

俺たちはいつも通りの道で山に登る。幽霊トンネルの前まで着いた。

「あのさ……」

「イヤ！」

景子は俺の言うことを先に読んで断る。

「どうせ、今日が最後だから幽霊トンネル抜けてみない？とか言うんでしょ？」

凶星だった。

俺たちが山に登って目指す場所はちょっとだけ展望台みたいになっている。山が拓けてい



て、そこから海を一望出来る。ベンチもあるから、そこに座って俺たちは夕日が沈むのを眺める。

そこへの道のりはひたすら階段を上るだけ。俺はたまに陸上部の練習でも使っていた。そのくらいわりと急な階段だった。

でも、一つだけショートカット出来るルートがある。それが今目の前にあるトンネル、通称「幽霊トンネル」だ。

ここを抜けると山の反対側へ出ることが出来る。隣町へは断然早く行ける。トンネルを抜けた隣町側から山に登ると展望台へは圧倒的に楽に登れる。勾配がこちら側と比べて緩やかだからだ。

だけど、このトンネルは簡単なバリケードが貼られていて、今は使用不可になっている。

理由は小さな頃は幽霊が出るからと言われた。昔、子供がこのトンネルに入って行方不明になったらしい。でも、誰もその事件の詳細は知らない。だから本当のことは分からない。そもそも幽霊が出るのと子供が行方不明になったのは別の問題な気がする。耐震の問題があるからとか言っていた人もいた気がする。

定期的に村の話し合いでこのトンネルを使えるようにしてくれ、新しいトンネルを作ってくれという意見は出る。高齢者にとって隣町へ楽に行けるのは嬉しいことだからだ。そういった意見を村長を通じて、市や府にアピールしているらしいが、何一つ相手にしてもらえないらしい。この村の力の無さが分かる。

とにかく、この「幽霊トンネル」には絶対に入るなどだけは親に強く言われている。というのも実は小学生のときこっそり入ったことがある。近所のお兄ちゃんたちに連れられて肝試しをしに行った。それが運悪く大人に見つかって、近所の人に怒られてしまった。なんでそんなに怒るのか分からなかったが、信じられないくらい怒鳴られた。それ以降、幽霊トンネルには入っていない。

そんな因縁のトンネルに入れるのも今日が最後かもしれない。冗談のつもりで景子に「抜けてみない？」言ってみようとした。正直、バリケードも中学生なら簡単に乗り越えられる質素なものだ。

「あんた、あんなに怒られたのにまだそんなこと言ってるの？」

そう言いながら、景子はトンネルの横の階段を上り始める。俺もあとを追う。

「冗談だよ」

「あんなに泣きじゃくってたのに」

そうだ。ガキだった俺はずっと怒られて、ずっと泣いていた。

「だから冗談だって」

前に行く景子の顔は見えないがたぶんニヤニヤしているのだろう。景子は泣いている俺を見ていつも笑う。陸上の大会でいい結果が出せずに泣いていたときも景子は「泣いてる」と笑ってきた。さすがにそのときは腹が立った。

景子はそのあとも「あのときも泣いていたな〜」って散々小さい頃のエピソードでからかってくる。

「景子だって、あのときめちゃくちゃ泣いてたじゃん」

俺はやられっぱなしはイヤだったので、やり返す。

「でも、あんときは光輔が悪かった……」

「あれは景子が余計なこと言うから……」

心菜がいないから俺たちの言い争いを止める人はいない。だけど、俺たちのこのくだらないやり取りも今日はなんだか感慨深い感じがした。

あれもこれも、明日で最後。その寂しさを感じているのは俺だけじゃない。景子も前を歩いているから表情は分からないが、言葉には少し元気がなかった。

俺たちは展望台に着いた。時間もちょうど良かった。あと五分もしないうちに夕日が沈みそうだ。

この展望台を俺たち以外の人が使っているのを見たことがない。屋根とベンチがあるちょ

つとした休憩所。昔は山頂に売店があったらしく、ハイキングに訪れる人もいたらしい。今はそんな観光客は一人もない。山頂は何度か登ったことがあるが、今は携帯会社のアンテナが立っているだけで、行っても何も無い。

年月だけが過ぎ、この小さな展望台だけポツンと残された。ベンチは木で出来ているが、もう雨風にさらされボロボロ。屋根もいつ壊れてもおかしくない。

だけど、ここから見る夕日は本当に綺麗だった。俺たち三人が昔、探検隊ごっこをしたときに見つけた穴場だった。それから今に至るまで、時々登っている。

他の学年の友達にはあまり教えたくなかった。別に隠すことではないし、見つけようと思えば簡単に見つかる場所だ。だけど、なんとなく「三人だけの秘密基地」のような気分だった。

「なんか飲もつか」

俺が言うと、景子もうなずく。

二台並んでいる自動販売機で俺たちは飲み物を買う。お小遣いをもらったときやちょっと誰かがめでたいことがあったときは飲み物を買って乾杯するのがお約束だった。誰かが誕生日のときとか、俺が大会で優勝したときとか。

俺はコーヒー。景子はコーンポタージュ。二人とも冬はいつもこれ。心菜はいつもココアだ。

俺たちはボロボロのベンチに座る。このベンチの裏側に三人で落書きしたこともあったっけ。たしか小学生のとき。なんて書いたか覚えてないけど、三人で悪い顔をしながらペンを走らせた思い出がある。

特に何も言わずに俺たちは乾杯した。

景子

夕日が沈むとあたりはたちまち暗くなる。田舎だから街灯も少ない。

ぬるくなったコーンポタージュを飲み切り、私は光輔と山を下りる。

下りる間は普段特に何も話さない。だけど、今日は無言がなぜか気まずかった。やっぱりこれが最後かと思うと寂しいからなのか。

急な階段を気をつけながら降りる。何度か踏み外して擦りむいたことがある。これだけ急だから私たち以外の村の人はあの展望台に行くことが無いんだろう。

「ん？」

階段がもうすぐ終わるといふときに光輔が突然声を出す。

「どうしたの？」

「あれ」

光輔が指さす方向を見ると、車が止まっていた。しかも、真っ黒の車。光輔に言われるまで気づかなかった。夜になると見えにくいくらい真っ黒。

村に住んでいる人が少ないので、住民の持っている車は全部知っている。だけど、こんな真っ黒の車を持っている人を私は知らない。

光輔と一緒に車に近づく。

「クラウンだ」

たぶん車の名前のことだと思う。私は車にはあまり詳しくない。

「誰の？」

「さあ」

やっぱり光輔もそこは分からないらしい。

「せたがや……」

車のナンバープレートの地名が「世田谷」となっている。東京にあることくらいは分かるけど、ちゃんとした位置とかは知らない。

なんて思っていたら、とあることに気づく。

「あれ？このナンバープレート！」

「ん？」

「私の誕生日だ」

ナンバープレートは『9-14』、私の誕生日は九月十四日。

「たしかに」

まあ「だから何」と言われればそれまでなんだけど。光輔はそんなことより、見慣れない車に興味津々だった。

止まっていたのは幽霊トンネルの手前だ。世田谷からなんらかの用事があってこの村に来た。よく分からないままトンネルまで来たが、通ることが出来ずに立ち往生している。そんなところだろうか。

でも、運転席にもその周りにも車の持ち主らしき人は見当たらなかった。光輔もぐるっと車を一周していたが、誰かが乗っている気配はない。

「ま、行くか」

「うん」

遅くなるともっと暗くなる。私たちはあの車のことが少し気になりながらも、その場をあとにした。

人が住んでいる地域まで帰ってきた。ここまで来たら、街灯も増えて夜でも安心だ。

あと少しで家に着く。光輔ともお別れ、というときに私は人影に気づく。

「タッチじゃない？」

高身長でひょろっとした影。見た瞬間に誰か分かる。

「本当だ」

「タッチ！」

タッチが振り返る。

上杉史也。私たちの担任の先生。理科を教えてくれている。

あだ名はタッチ。あの有名漫画の主人公と名字が一緒だから。心菜が名付け親だ。名字が一緒というだけで、別に双子でもないし、野球も好きではない。

結局「タッチ」が完全に定着してしまい、今ではお父さんお母さんから「タッチ」と呼ばれている。

優しい先生で生徒からも好かれている。三人ともタッチのことは好きだ。他の学年の生徒からも好かれている。学生数が少ないこともあり、タッチと過ごす時間もかなり多かった。

タッチと初めて会ったのは小学校のとき。百白村は小学校と中学校が隣同士にある。小学生のときから中学の先生とも交流はあったし、小学校を卒業しても小学校の先生と交流することも多かった。

百白村には公園がない。遊ぶとなると、解放されている小学校の校庭になる。そこでドッジボールやサッカーをしていると少し手が空いた先生が乱入してくるなんてことがよくあった。もう少し都会に住んでいる親戚にこの話しをすると驚かれる。普通、学校の先生はそんなことはしないらしい。

私たちが小学生のときからタッチとは仲が良かった。校庭で一緒に遊んだこともよくある。私たちが小学校に入学したのと同時にタッチは百白中学校に新卒で赴任してきた。あのときは気づかなかったけど、入学式の日にお花をつけてくれたり、写真を撮ってくれたりしたのはタッチだったらしい。

「新人だからずっと雑用させられてたんだよね」

って、中学校で私たちの担任になってからあの日のことを話してくれたっけ。普通は高学年のお兄さんやお姉さんがやることらしい。だけど生徒が少ない百白中学校はそういった雑用を先生がやらされることにタッチは戸惑ったらしい。タッチは出身はこの村ではない。だけど、もう何年も百白村中学校で働いているので、みんな村の住人の一人って思っているような気がする。そのくらい親しみやすい先生だった。

タッチは私たちに気がつく。

「佐々木と……福山か」

タッチは私たちのことを必ず名字で呼ぶ。私のことは「佐々木」。光輔のことは「福山」。心菜は「泉」。

タッチはどこかおどおどしている。何か私たちに見つかったらまずいことでもあるのだろうか。

「どうしたのタッチ？」

「いや、なんでもないよ」

なんでもないようには見えなかった。

「君たちこそ何してるの？」

私たちが何か言うのを遮るように、タッチは聞いてくる。

「山に登って夕日見てた」

光輔が答える。

「そっか、気をつけて帰りなよ」

「タッチはどっか行くの？」

今度は私が聞く。

「卒業式の準備がまだちょっと残ってるから学校に行かなくちゃなんだ」

「ふーん」

「じゃあ」

タッチは手を振ってその場を離れた。

心菜

……緊張した。

景子と光輔には絶対に見つかってはいけなかった。二人の目はかいくぐれたらしい。

いけないことをしてしまった。だから他の人にも見つかったやいけなかった。それもなんとかクリアした。

「ふう……」

私はベッドの上で紙袋を抱く。これがあれば……

「光輔は明後日この村を出るの。明日は卒業式。告るんなら、今日か明日。はい、どうする？」

景子の言葉が脳で繰り返される。

今日はもう終わった。まだ三時間くらいあるけど、もう光輔には会えない。

メール？いや、メールで告白は嫌がる人も多たって聞いたことある。

私は究極の二択を迫られた。

明日告白するか。しないか。



そのことで頭がいっぱいになる。

明日になれば、みんなは離れ離れになる。

光輔との思い出はいっぱいある。

中二の夏のこと。

「はいこれ」

私はいつも放課後は教室に残っていた。光輔は毎日部活。景子はたまに一緒に残ってくれるけど、だいたい塾があった。私だけ何もしてなかった。だから一人で教室で自習したりしていた。と言っても、ほとんど勉強なんてしてなかったけど。

ある日のこと。そんな教室でひとりぼっちの私にタッチがなにやら紙を渡してきた。

「何これ」

「宝探ししよ」

四つ折りの紙を開くと、そこにはタッチが直筆で書いた文字があった。

ちゅうけたえさ

上を向いて歩こう

「どういう意味？」

「それは泉が考えるんだよ」

どうやら暗号らしい。

結局、私はそれからしばらくの間その暗号とにらめっこした。

「ち、う、う、け、た、え、さ」

何度も何度も口にする。でも分からない。

そんな私を見てタッチはずっとニヤニヤしていた。

「なんで笑ってんの？」

「いや、こんなに夢中になってくれるとは思ってなくて」

たしかに時計を見たら想像以上に時間が過ぎていた。私はこんなに長い間考えていたのか。

「タッチじゃん」

しばらく経っただろうか。私たち二人のもとへ光輔が来る。

「光輔、何しに来たの？」

「え？荷物取りに来たんだよ」

「もうそんな時間！？」

気づけば日も暮れ始めていて、部活動も終わっていた。この中学校には部室がないので、光輔は教室に荷物を置いて部活動に行く。

「心菜こそ何してんの？」

「これ」

私は暗号を光輔に見せる。

「何これ」

「私もよくわかんない」

光輔は二十秒ほど紙を見つめる。

「……た、い、い、く、そ、う、こ。ああ、体育倉庫か」

「ええ!？」

光輔はあっという間に暗号を解いた。

「タッチ、合ってる？」

私が聞くとタッチはうなずく。

「え?なんで?なんで体育倉庫なの？」

『上を向いて歩こう』ってやつがヒントでしょ?だから、それぞれのひらがなの一つ上を読むの。例えば「ち」だったら「た」。

光輔はいとも簡単に解き、解説してくれた。なるほど、それで「ちううけたえさ」のひとつ上が「たいいくそうこ」になるのか。

「すごいね、光輔」

「全然。こんなのよくある暗号だよ」

光輔は笑いながら答える。

「ありがとう。じゃあ一緒に体育倉庫行こ？」

「ええ？」

強引に誘って私と光輔は体育倉庫へ向かう。うしろをタッチも着いてくる。

体育倉庫の扉を開けると倉庫には似つかわない白い箱が置いてあった。

私は箱のフタをゆっくりと開ける。中にはキャンディーが一個入っていた。

「これだけ？」

「これだけ」

タッチが後ろから答える。

「え、これなんなの？」

光輔が私とタッチ両方に聞く。暗号を解いて宝探しをするゲームなのは分かる。だけど、これで何がしたいのかは私も分からなかった。

「泉がさ、いつも一人で寂しそうだから、新しい部活でも始めようかなって」

「部活？」

「部活？」

私と光輔がハモる。

「『暗号部』。顧問は俺。毎週月曜日に暗号を泉に出題する。それを泉が解く」

タッチはしたり顔で宣言するかのように言う。

「部活って言っても入部届はいらない。ルールもない。どう？入部する？」

私の答えは決まっていた。

「する！」

私の声が体育倉庫に響いた。

あんまり深く考えず答えたが、別にいいや。暗号部。なんだかワクワクするし、たぶん楽しい。入る以外の選択肢は無かった。

私は勢いで隣の光輔にも聞く。

「光輔も入るよね？」

「はあ？」

今度は光輔の声が響く。

「俺は陸上部がある」

「いいじゃん。兼部しよ！」

「……………」

私は光輔の手をつかみ、上へあげる。同時に私のもう片方の手もあげる。

「二人入部します！」

「よし」

「おい！」

結局、私と光輔は「暗号部」に入部することになった。

光輔

卒業式の朝……のはずだった。

いつも起きる時間より早い時間に母親が俺の部屋に入ってきた。

「光輔、大変よ」

どうせ大したことないんだろうなって、もうちょっとだけ寝かせてくれよって、このときは思った。

「莉子ちゃんがいなくなったんでって」

その言葉を聞いたときはまだ事の重大さが理解できていなかった。

「警察の人が来てる」

俺は今が現実であることを確認しながら、とりあえず母に言われたとおりに着替えた。一階に行くと、スーツを着た男が一人いる。いつも家族でご飯を食べるテーブルに座っていた。

「光輔くんですか」

「はい、そうです」

どうしていいかわからない俺の代わりに母が答える。

「朝早くにすみません。光輔くん、少しだけ話がしたいんだ、いいかな？」

俺は小さくうなずき対面に座る。

「私、刑事をやっています、益川と申します」

益川さんは中学生の俺にも丁寧に頭を下げる。

益川さんはおそらく五十代くらいの渋い男の刑事さんだった。歳を重ねている感じは見取れるが老いている感じは全くない不思議な人だった。なんとというか、すごく若々しい雰囲気が出ている。

当然益川さんの表情はかなり強張っており、真剣なまなざしをしている。それなのに、どこ

か優しさを感じる人だった。まだ顔を見て十秒も経っていないが、なんとなくちゃんと「いい人」なんだろうと分かる感じ。

俺がテーブルにつき、この空気を察したところで益川さんは切り出した。

「さきほどお母さまからも少し聞いたかと思いますが……」

その内容はこうだ。

景子のお姉ちゃんである莉子ちゃんが行方不明らしい。最後に目撃されたのは昨日の夕方。高校から帰っているところを町の人が見かけていた。

自宅には学校用のかばんは置いてあり、自宅には一度帰宅した痕跡が残っていた。佐々木家には昨日は一日中誰もいなかったとのこと。昨日俺と別れたあと景子が帰ったときも家には誰もいなかったそう。

部屋からは携帯電話だけがなくなっていた。あとは制服と靴は見つかっていないので、身につけたまま行方不明になったのではないかと推測されている。

最後の目撃情報が十七時。そこからは一切、莉子ちゃんは目撃されておらず、連絡もついていない。

莉子ちゃんの携帯電話に電話やメールは何度もしたらしい。しかし、電源が入っておらずもちろん返信もない。

景子のお姉ちゃんである莉子ちゃんとは何度も遊んだことがある。高校二年生だ。次の四月からは高校三年生でいよいよ本格的に大学受験の勉強を始める時期だ。景子とは顔は似ているがお姉ちゃんのほうが大人しい。静かな女の子だった。

俺たちは「莉子ちゃん」と普段から呼んでいる。高校も府内の名門私立高校に通っていて成績も優秀。町の人みんな「頭のいい」「礼儀正しい」という印象を持っていた。

小さな頃はたまに俺と心菜と景子の三人に加わって遊んだ。まだ「先輩」や「後輩」なんて考えが無かった頃だ。歳の違う近所の友達大人数で大縄をしたり、かくれんぼをしたりして日が暮れるまでひたすら遊んだ。

莉子ちゃんが中学校に入学したあたりから一緒に遊んだりすることはめっきり少なくなった。それでもこの田舎だからすれ違うことはよくあった。高校の制服を着て帰宅する莉子ちゃんを何度も見たことがある。

その莉子ちゃんがいなくなった。

俺は少しずつ目が覚めていき、今自分たちの周りでものすごいことが起きていることを実感した。

「昨日、莉子さんを見かけたりはしていないかい？」

「……してないです」

「ちなみに光輔くんは昨日何をしていたか教えてもらえるかな？」

俺はこと細やかに昨日の行動を話した。学校に行ったこと、タイムカプセルを埋めたこと、山に登ったこと、全てを正直に話す。

「その間に何か不審な人物とか見てないかな？」

不審……。 「特に何もなかった」と答えようとした寸前に思い出す。

「車……」

「ん？」

「変な車、昨日見ました」

俺は山に登ったときに見た車の話をした。黒色のクラウン。今思い出すとあの車が何か事件のカギを握っているのではと思った。

一通り話し終えると益川さんは手帳にメモしていた手を止めた。

「ありがとう。実は景子さんからも聞いてたんだ」

……ああ、そっか。そりゃそうだ、景子だってあんな怪しい車を見たら刑事さんに言うに決



まっている。

「景子さんが言ったことと何一つ食い違わなかった。そのおかげでこの手がかりの信憑性が上がったよ」

益川さんはにっこりと俺に顔を向ける。この緊急事態のなかでも冷静に周りを落ち着かせようとしているのが分かった。

「でも車種までよく覚えていたね」

「いや……」

たしかに景子はあまり車には詳しくない。自分も有益な情報を言えたかと思うと少し安心した。もしこの車がこの事件に何か重要な影響を与えるものだとしたら、すぐに解決に向かうかもしれない。

「益川さん。あの僕からもいいですか？」

「うん」

「景子は……景子は元気ですか？」

益川さんは少しだけうつむく。

「家にはいるんだけど、かなり動揺してる感じだった。家族全員で昨日の晩からずっとこの辺りを探し回って。で、今日の朝三時に通報があったんだ。五時くらいに景子さんには会ったんだけど、そのときは寝てないこともあって疲れてる様子だったよ」

「莉子ちゃん……莉子さんは家に書き置きとかはしてなかったんですか？」

「全く。家出をするような素振りも全くなかったらしいし、何かに悩んでいる様子もなかったってお母さんが。こんなこと言いたくないんだけど、遺書とかも見つかっていない」

つまり、忽然と姿が消えたというわけだ。

「他に聞きたいことはある？」

「いや……」

この瞬間にもう一つのことを思い出す。

タッチ。あの先生と昨日会ったときは何かを隠しているような、そんな感じがあった。

「あの……上杉先生っていう、僕たちの担任の先生がいるんですけど」

「ああ、それも同じことを景子さんから聞いてるよ」

「そうですか」

昨日のタッチの姿が少し変だったことや、会ったときの時間帯なども伝えたがどれも景子が言っていたようだ。

「まだ学校には行けてないんだ。あとで事情を聞くよ」

俺は少しイヤなことをした気分になる。タッチが何か悪いことをしたとチクったような気がしたからだ。

でも、タッチは何か悪いことをするような人間じゃない、とも思ったけど益川さんには言えなかった。

景子

朝七時。本当だったら起きて学校へ行く支度をする時間。でも今日は違った。

昨日から全く寝ていない。だけど全く眠たくない。不思議だ。

お姉ちゃんがいなくなった。

「おかしい」となったのは昨日の夜、二十一時。佐々木家の門限がこの時間だ。

そのときはお母さんは怒っていた。時間通りに帰ってこないうえに連絡の一つもない娘に。

お母さんが電話をしたりメールをしたりしても繋がらない。はじめはちょっと心配だったが大したことはないだろうと思っていた。

二十二時。さすがに何かおかしいと思い始める。お母さんは高校やお姉ちゃんがいそうな場所に片っ端から連絡していた。それでも、普段通り高校の授業を受けていたこと以外は何も分からない。お父さんも帰ってきたので、家族三人で家の周りを探した。

このとき、何か親には言いにくいことがあるんじゃないかと思った私はこっそりお姉ちゃんにメールをした。

『何かあったの？電話しようか？』

その返事は未だに無い。そのしばらくあとに電話もしたが、電源が入っていなかった。

結局、日付が回るくらいまで搜索したがお姉ちゃんは見つからず家族三人で帰宅。

お姉ちゃんの部屋を改めてくまなく探したが、置き手紙や何か手がかりになるようなものはなかった。携帯電話がどこにもないことも分かった。

そのあとはお母さんは近所の家を回って、お姉ちゃんの姿を見ていないか聞いて回っていた。夜中に明かりのついている家に頭を下げて聞いて回っていたみたいだ。

お父さんは懐中電灯を持って搜索を続けた。

私は「家にいなさい」と言われたから家にいた。特に何かすることは出来なかった。眠れるわけなかったし、かといって出来ることもない。たまにお姉ちゃんに電話をして、繋がらないのを確認した。ずっとソワソワしていた。

午前三時目前。もう一度家族三人が家に揃い、お父さんが警察に電話をすることを決めた。

夜中にも関わらず警察の人はすぐに来てくれた。パトカーが一台家の前に止まり、中から三人男の人が出てきた。一人はそれなりに歳を取ったベテランな感じがする刑事さん。あとの二人はもう少し若かった。

家にあがるとすぐさま事情聴取を受けた。担当してくれるのは益川さんって刑事さんだった。さっき見たベテランな雰囲気刑事さんだ。

どうしていいかわからない私たちにゆっくり話しかけてくれる、優しい刑事さんだった。

私たち家族三人は話せることを全部話した。と言っても、私は茫然としていて聞かれたことにしか答えられなかった。

覚えているのは「昨日何をしていたか」を聞かれたこと。私は思い出せる限り詳しく昨日の行動を話した。光輔や心菜と一緒にいたことも。光輔や心菜についても聞かれたので話した。これから取り調べするのに必要な情報らしい。

光輔たちと一緒に過ごしていたことを話している間、あまり母親の顔を見ることは出来なかった。母親は光輔や心菜のことがあまり好きではない。明確に口にするわけではないが、なんとなく嫌っているのが分かる。たぶん私の勉強を邪魔している友人とでも思っているのだろう。さすがにこの状況で何か言われることはなかったが両親の顔はあまり見ることが出来なかった。

お姉ちゃんに関することや家族全員の昨日の行動を一通り話し終えたあと、益川さんはこれからについてゆっくり説明してくれた。

とりあえず「搜索願」を届けることになった。益川さんいわく現時点では何も分からないが誘拐の可能性もあると言われた。

「景子さん。昨日何か不審な人物を見たりしていないかい？」

寝ていないこともあって思考が停止していたが、ひとつだけ「ピン」と思い当たることがあった。

あの車だ。光輔と山に登ったときに見たあの車。

私は車の話を益川さんにした。ずっと緊張状態で口もカラカラだったから、話すのに苦労した。しどろもどろになりながらも、私はナンバープレートのことも伝える。

「どうしてそこまで覚えてるんだい？」

「誕生日だったんです、私の。それで光輔と……光輔くんと話題になったんです」

益川さんは手元の手帳にペンを走らせる。かなり有益な情報ではないだろうか。もしこれが「誘拐」だとしたら、犯人が犯行に使った車の可能性だってある。

「他には何か怪しい人やものは見ていないかい？」

昨日の自分を必死に思い出す。一人だけ気になる人を思い出した。

タッチだ。

昨日会ったとき、タッチは何か変な様子だった。タッチは前にお姉ちゃんの担任だったこともある。ひょっとすると何か関係があるのかもしれない。

タッチに余計な容疑がかけられるのは辛かったし、そもそもタッチが悪いことをするような人ではないことも分かっている。

でも、私はタッチと会ったことやそのときの様子を益川さんに伝えた。

「ありがとう。またあとで学校にも行くよ」

益川さんはほんのちょっと顔を緩めて私に言ってくれた。少しだけホっとした。

村がどんどん明るくなる。日は完全に昇りいい天気朝だ。本当だったら卒業式の最高の朝のはずだったのに。

どうなるんだろう、卒業式。言いたかったけど、言える空気ではなかった。お父さんもお母さんも目の焦点が定まっていない。

私の携帯電話が鳴る。光輔からの着信だった。私は電話に出る。

「もしもし」

「もしもし……大丈夫か、景子」

「……うん」

大丈夫ではなかったけど、そう答えるしかなかった。

「良かった。とりあえず声が聞けて安心した。とりあえず、俺に出来ることがあったらなんでも言ってほしい」

電話越しだけど光輔も混乱しているのが分かる。声だけでも相手の表情が想像出来るのは長年一緒にいたせいだ。光輔はそれでも私を安心させようとしてくれているのが分かる。

「ありがとう」

「うん。とりあえず、自分に出来ること、俺はするから」

「うん」

「じゃあ」

電話を切ると、お母さんも家の電話に出ていた。

しばらくして切ると、お母さんはゆっくりと言った。

「卒業式、無くなるかもって」

「え？」

「校長先生から。先生もどうしていいか分からないって。でも、今は家でゆっくりしてほしいって。状況を見ながらまた連絡しますって」

お姉ちゃん。お願いだから帰ってきて欲しい。今なら間に合う。

私はただただそれだけを願った。

心菜

卒業式二日前。

「これで俺も泉も暗号部引退だ」

「え？」

「これが暗号部最後の暗号」

タッチがあの日のように暗号を紙に書いて渡してくれた。だけど、こうして宝探しごっこが出来るのもこれが最後らしい。

暗号部を始めた最初の方は私だけの力で解けないことが多かった。そういうときは結局教室に戻ってきた光輔に見てもらう。

光輔はしばらくじっと眺めたあと、だいたい数分で暗号を解く。私が何時間もかけて考えていたのに。

それが悔しくて悔しくてたまらなかったので、私はいつも光輔が部活終わりに教室に来るまでに解くのが目標になっていた。

中三になったあたりから、私の解くスピードもあがった。光輔が来る前に暗号を解き切ることも多くなった。

でも、最近は受験勉強をしなくちゃいけなかったからタッチも暗号を出してくれなかった。その代わりに私が苦手なところをマンツーマンで教えてくれたりした。

「タッチ、暗号は？」

「受験が終わるまで我慢」

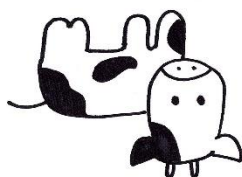
何度も何度もねだったがタッチは受験が終わるまでは勉強モードだった。仕方がない。私も暗号なんかで遊んでいる暇なんてなくて勉強しなきゃいけないことは分かっていた。

そして、やっと受験が終わり、学校も卒業式を残すのみとなった今日。タッチは約束通り暗

号を出してくれた。

紙を開くといつものタッチのお世辞にもうまいとは言えないイラストが描かれている。

白 - 黒 = 16



数式のようなものとさかさまに描かれた牛。

私は黙り込む。考えるときはいつもこうだ。

「最後だからめっちゃくちゃ難しくしといた」

「え〜〜？もし分かんなかったらどうするの？」

「まあ福山なら解けるだろ？」

なんとなくだけど、タッチは私が光輔のことが好きなのが分かっているみたいだった。直接は言わないけどやんわりと光輔の名前を出す。そして、ほんのちょっとなんまり笑う。そのたびに恥ずかしいような嬉しいような複雑な気持ちになる。ちょっとだけ怒りもある。かといって言いがかることも出来ない。それで余計に腹が立った。

いつもなら部活終わりの光輔が教室にやってきて暗号を解く。だけど、今日はそれはない。光輔はとっくの昔に陸上部を引退している。高校でも陸上を続けるから、たまに校庭で走っているのを見かける。けど前みたいに練習終わりに光輔が教室に戻ってくるなんてことは



もうなかった。

つまり、もし私がこの暗号を解くことが出来ず光輔の力を借りるとなったら、私が直接光輔に暗号を見せにいかなきゃいけない。

……それはイヤだ。

別に普通に見せればいいんだけど、やっぱり悔しい。光輔はきっとものの数分で簡単に解くだろう。最後の最後でそれはイヤだ。

私はいつも以上に力を入れて、最後の暗号と向き合った。

「まあもし福山も解けなかったら……」

「解けなかったら？」

「卒業式に答え言うよ」

タッチはニコッと笑う。

それはもっとイヤだ。絶対にイヤだ。完全に敗北になる。

自分の力だけで解く。私はタッチのその言葉をもらった瞬間からひたすら暗号解読に集中した。

数時間経過しただろうか。……分からなかった。

「また明日」

タッチと別れるときはとにかく憎い顔に見えた。だけどちょっと久しぶりにこの感じを味わえたのはまんざらでもなかった。

卒業式前日。昼も夜も暗号をぼんやり眺めていたけど、なんにも分からない。

タッチに答えを教わるのだけは避けたかった。散々悩んで、暗号は解けなくて、もがいてもがいて……。出た結論はこうだった。

明日光輔の力を借りよう。

そう思い、暗号の紙をカバンにしまって私は眠りについた。

次の日。結局、卒業式は中止になった。

景子のお姉ちゃん、莉子ちゃんがいなくなった。

私のところにも刑事さんが来た。色々と質問をされた。けど、何を話したかあんまり覚えてない。少し嘘もついた気がするけど、たぶん大したことはないと思う。

そのニュースは瞬く間に村全域に広がった。そして、みんなびっくりしていた。

あの莉子ちゃんが自分で家出をするような子ではない。誘拐されたんじゃないか、というのが村の人の考えだった。

私はどうすることも出来なかった。景子に声をかけてあげたかったけど、なんて言えばいいか分からない。だから、何もしなかった。

光輔のことも気になった。ただ私が声を聞いて安心したいだけだったかもしれない。だけど、電話をする理由がなかった。

結局、昼過ぎに卒業式の中止が決まった。お母さんが学校からの電話でそう決まったと教えてくれた。

ショックだった。どうして？ どうしてこうなったんだ？ 私の行動は全て無駄になってしまふのか？

景子のことも心配だったけれど、自分のことばかり考えてしまう。こういうとき自分という人間がイヤになる。

私は自分の色々な気持ちを整理することが出来ないまま卒業することになった。

光輔に想いを伝えることも。暗号部最後の暗号の答えも。

校長先生は卒業式の延期なども考えてくれた。だけど、景子は事件のことと四月から東京に住むことでそれどころではなかったし、光輔も卒業式があったはずの日の翌日には村を離れていた。

「泉さん一人だけでもやらないか」と言ってもらえたが、そんな卒業式は私にとって何の意味もないから断った。

光輔と景子とはタイムカプセルを埋めたときにしゃべったのが最後。それっきり、光輔は徳島へ、景子は東京へ行ってしまった。

私は二人に今度会ったときなんて話せばいいか分からないし、なんとなくもう会えないような気もしていた。

最近は三人でいてもずっと寂しい気持ちしか出て来なかった。それなのにあの二人はそこまで寂しそうな素振りも見せず、いつも通りだった。きっと二人にとって、三人が離れ離れになることはそんなに大きなことではないんだろう。

私だけだ。私だけまだ大人になれてない。景子と光輔は私たちがいなくても生きていけるけど、私だけがあの三人とずっと一緒にいたいなんて甘えた気持ちでいるんだ。

二人に「さよなら」が言えなかった。いつも自分のことだけ考えて生きてきた私への罰か何かだろう。これはきっと。

村に一人残された私は中学校までの思い出は胸の奥に封印することにした。

携帯電話の番号とメールアドレスも変えた。二人の連絡先も消した。

もういい。私はこの村で一人で生きよう。そう思った。

莉子

私はいいい子だった。

「莉子ちゃんは偉いね」

「さすが莉子ちゃん」

「莉子ちゃんは将来立派な大人になるんだろうなあ」

私がずっと言われてきた言葉。周りから常に期待される。いい高校に行って、いい大学に行って、いい会社に就職して……。そんな未来を描いて生きてきた。

いつからだろうか、それが辛くなったのは。いつからだろうか、未来を描くのが苦痛になったのは。私はいつの間にか無理矢理未来を描こうともがいていた。

いい成績を取っても誰も褒めてくれなくなった。それが当たり前でしょ？って言われてるみたいだった。

「また佐々木が一位か」

クラスメートにそう言われるのも、昔は誇らしげだった。でも今は嫌味にしか聞こえない。もう今は私の周りにはいる人は全員敵に見えた。

逆に成績が落ちると怒られた。どうして勉強しなかったんだって。私がどれだけ勉強しているかもしらないくせに。

「佐々木どうしたんだ？」

先生も平気でこう言うてる。それが私にとってどれだけ辛いことかも分からないくせに。

昔は勉強は嫌いじゃなかった。勉強すれば親が喜ぶ。勉強すればテストで良い点が取れる。勉強すれば褒めてもらえる。勉強は気分が良くなる楽しいものだった。

「将来何になりたいの？」

よく聞かれる質問。私は昔から「わかんない」と答えていた。言葉の通り分からないからだ。

中学生になって少しずつ私も大人に近づいた。近づけば近づくほど、心の中の不安が大きくなった。

私は将来何になりたいんだろう。一体何のために勉強しているんだろう。

それでも勉強すればきっと何か見つけられる。そう信じて勉強し続けてきた。常に成績を落としてはいけないプレッシャーと自分の中の不安と戦いながら。

今思えばずっと誤魔化してたんだと思う。大丈夫、自分はいい子なんだから、真面目なんだからって言い聞かせて誤魔化していた。

だけど、それが出来なくなった。

高校生になったある日、突然机に向かうのが辛くなった。

「私は何のために勉強しているんだ？」

その質問に答えることが出来ずにペンを持つ手が止まった。

でも勉強をしなかったらテストで点が取れない。すると、親に怒られる。

私はその恐怖でしか動くことが出来なかった。モチベーションも目標もない。ただただ怒られたくないという気持ちだけで机に向かい続けた。

苦しい。いつまでこの生活が続く？いつかはこの家を出ていくかもしれない。だけど、いつまでもいつまでも私は「いい子」でい続けなければいけないのか？一生？

歯を食いしばってペンを持つ手を動かす。この苦しみから抜け出したくなった。

誰でもいい。誰か私を助けて欲しい。私は小さなSOSを出した。

誰も私のことなんて助けてくれやしない。そんなこと分かっていた。私より苦しんでいる人なんて世界中に山ほどいる。私なんて……。

高校生の夏休み。私が出した結論は死ぬことだった。

遺書も書かずに突然死のうと思った。そりゃみんな悲しむだろう。「なんで？」って。だけど、無理矢理未来を描くのが苦しいなんて、きっと誰も理解してくれない。私がこんなに苦

しんでいるのだから、みんなも苦しめばいい。なんで莉子は死んだのかって苦しめばいい。そう思った。

死ぬ方法を携帯電話で調べる。どれもこれも辛いものばかりだった。失敗したら後遺症が残る。周りの人にも危害が及ぶ。実際に後遺症が残った人のメッセージなんか載っている。結局、最後はこう書かれている。自殺はやめよう。

違う。私が求めているのはそんなことじゃない。心の相談室みたいなところへの電話番号が欲しいんじゃない。脅されて自殺を止めてほしいんでもない。

私はただただ楽になりたい。それだけなのに。

死ぬ怖さとそれでも死にたいという気持ちが揺れ動く。それとともに時間は流れ続ける。大学受験はいつかやってくる。これから逃れるのは絶対に無理だ。

どうすればいい。私はどうすればいい。

そんな私に手を差し伸べてくれる人がいた。私の発していた小さなSOSに気づいてくれる人がいた。

「僕なら君を楽に出来ると思うんだ」

突然私に差した一筋の光。もう限界まで追い詰められていた私にとってそれは奇跡としか言いようがなかった。

私にとって彼は救世主だった。何も疑うことなく彼の言うことを信じた。

楽になれる。彼についていけば楽になれるんだ。

「いいのか？」

運転席の彼が言う。

「うん」

「僕がエンジンをかけたら、もうこことはお別れだ。いいんだな」

あまりに大事な質問だった。「うん」と答える以外の選択肢はなかった。だけど、本当にこれでいいのかとささやく自分もいた。

家族や妹はどう思うだろうか。村の人はどう思うだろうか。

ここで「うん」と答えたら、もう絶対に過去に戻ることは出来ない。

私はここまでの人生を捨てる選択をした。そしてこの人の言うことを信じることにした。この人なら私の望んだとおりにしてくれる。

「うん」

「オッケー。大丈夫。それで大丈夫だよ」

彼は安心させるように私にそう言ってくれた。

車の大きなエンジン音が響く。真っ黒の闇の中で真っ黒な車が静かに動き始める。彼は大きくハンドルを切った。

ゆっくりと車がこの村に背を向けて走り出した。

なぜか分からないけど涙が出てきた。「これでいい」何度も何度も自分にそうつぶやく。

「はい」

彼がペットボトルの水を渡してくる。

「飲みな」

私はそっとキャップを空けて水を飲む。緊張で喉がうまく開かないけれど、なんとか押し込む。

視界は少しずつ活気のあるあふれた町並みへと変わっていく。何もない田舎の面影が段々と減っていく。

私は私を捨てた。